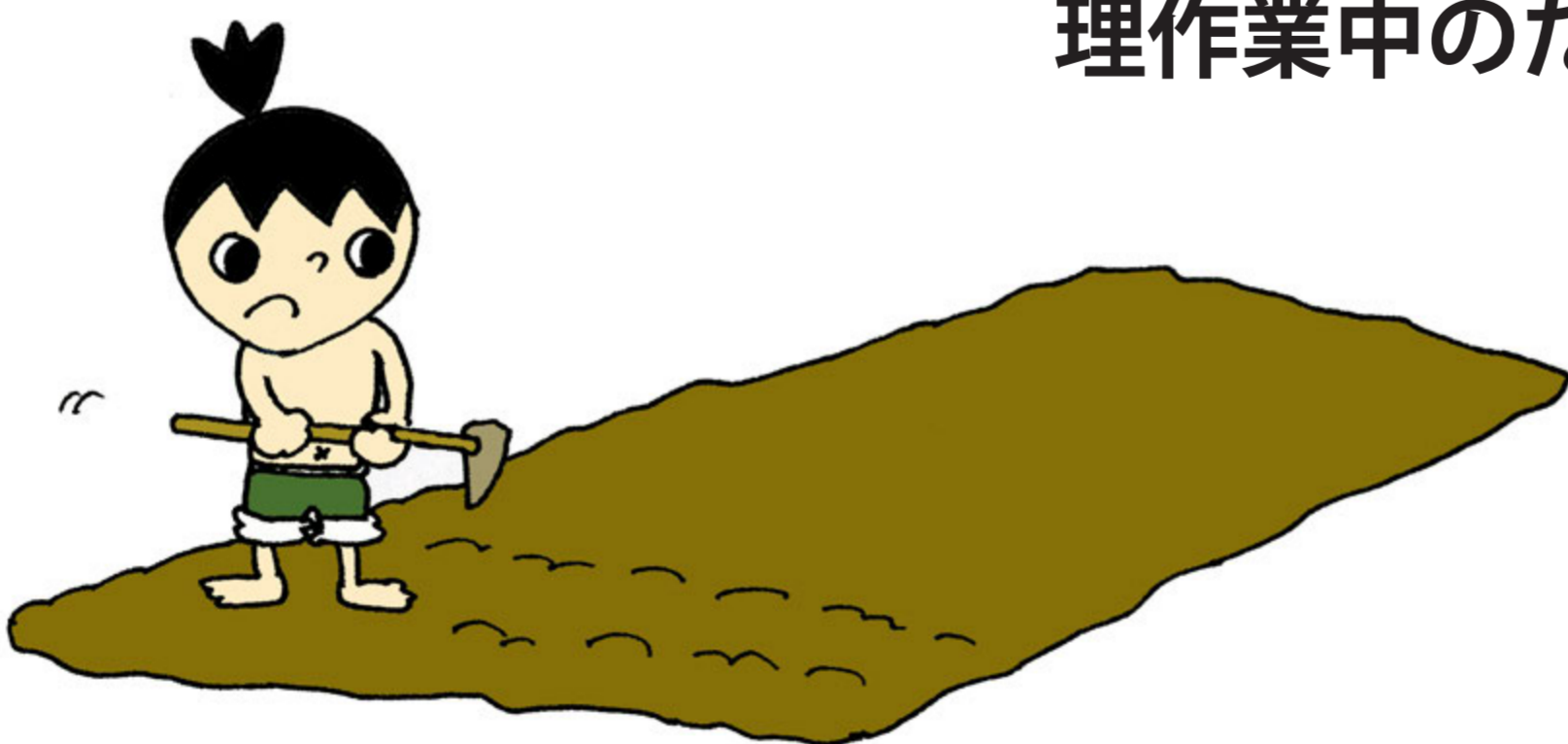


古代の成果（1）

川上城跡では掘立柱建物跡と方形土坑が検出され、越州窯青磁や緑釉陶器とともに多くの土師器が出土しました。特に、「下田」の文字が書かれた墨書土器は、1,100年前まで付近の地名がさかのぼることを示します。

山口遺跡と北麓原D遺跡では、掘立柱建物跡の他に畝状遺構がみつかかり、畑をつくっていました。これらの方向は東西南北に合っており、台地上にも律令体制が浸透していた状況をうかがわせます。また、山口遺跡では貝殻を捨てた土坑もあり、6km離れた海の貝を食べていたこともわかりました。

※ 川上城遺跡の墨書土器は、現在、整理作業中のため展示しておりません。

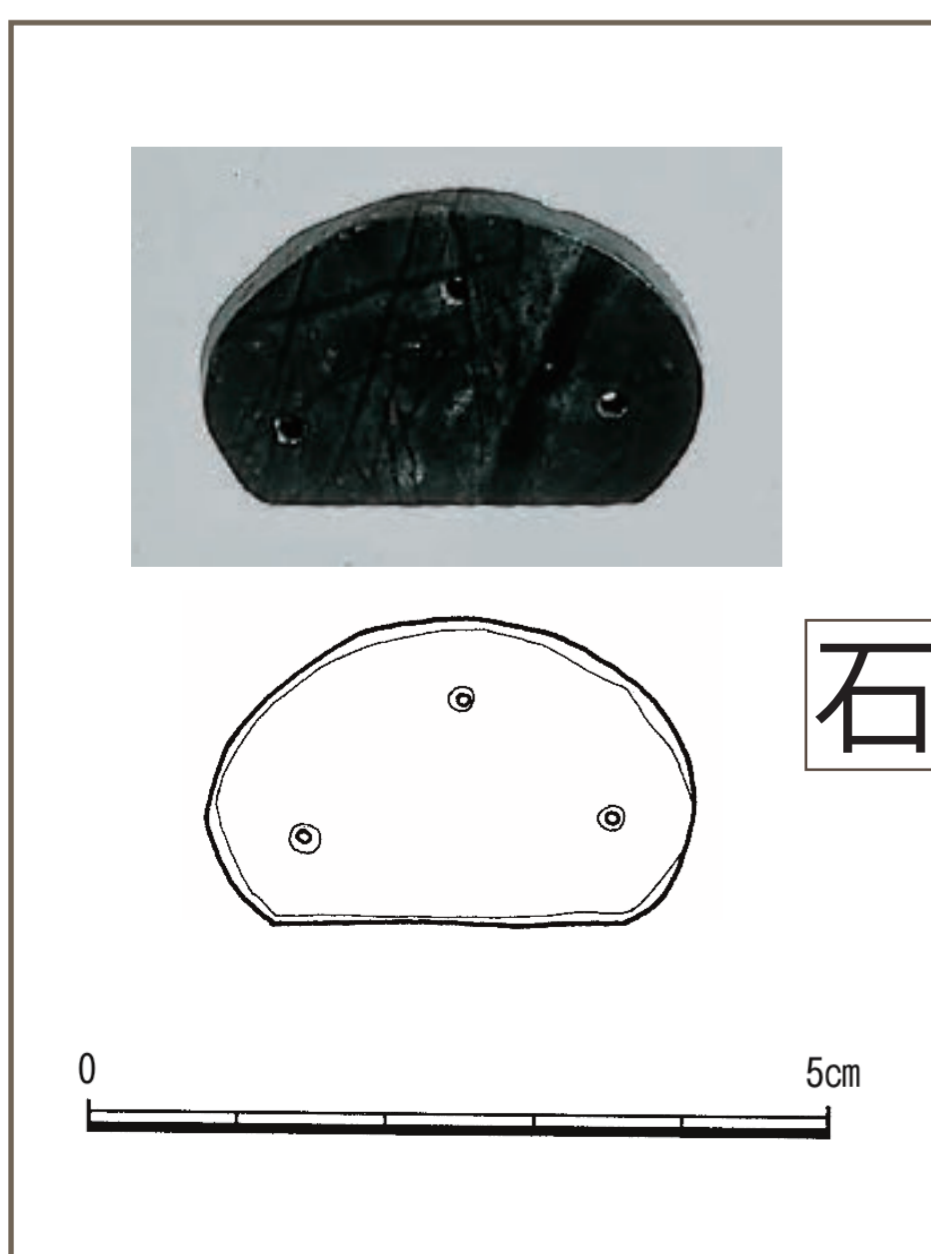


古代の成果（2）

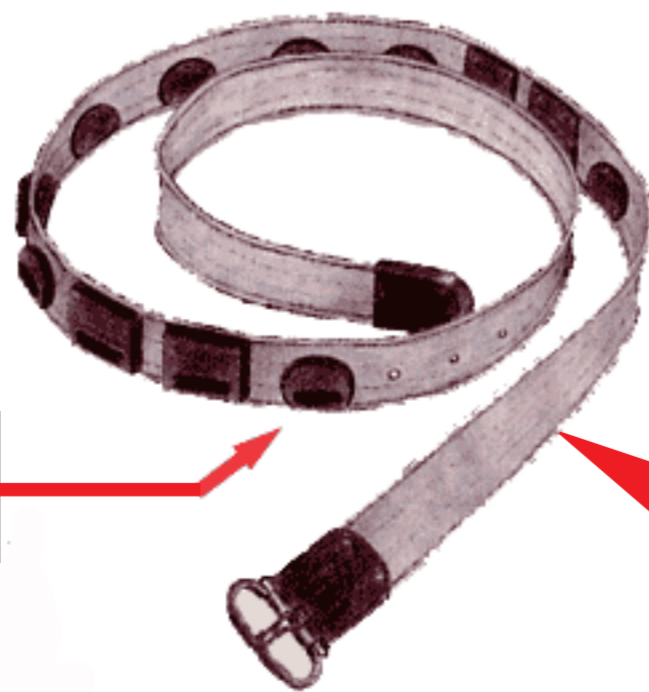
芝原遺跡では、多量の墨書土器とともに役人が付けていた石帯^{せきたい}が出土し、役所に関連する施設があったことが報告されました。遺跡近くにある中岳山麓窯跡群で焼かれた須恵器も多く、大甕も復元されました。

外畠遺跡の土師甕を伴う土坑は、火葬した時に使われた施設であることが報告されました。

これらの遺跡は、ほとんどが9世紀から10世紀にかけてのものであり、8世紀前半から7世紀代の遺跡は依然として不明のままです。



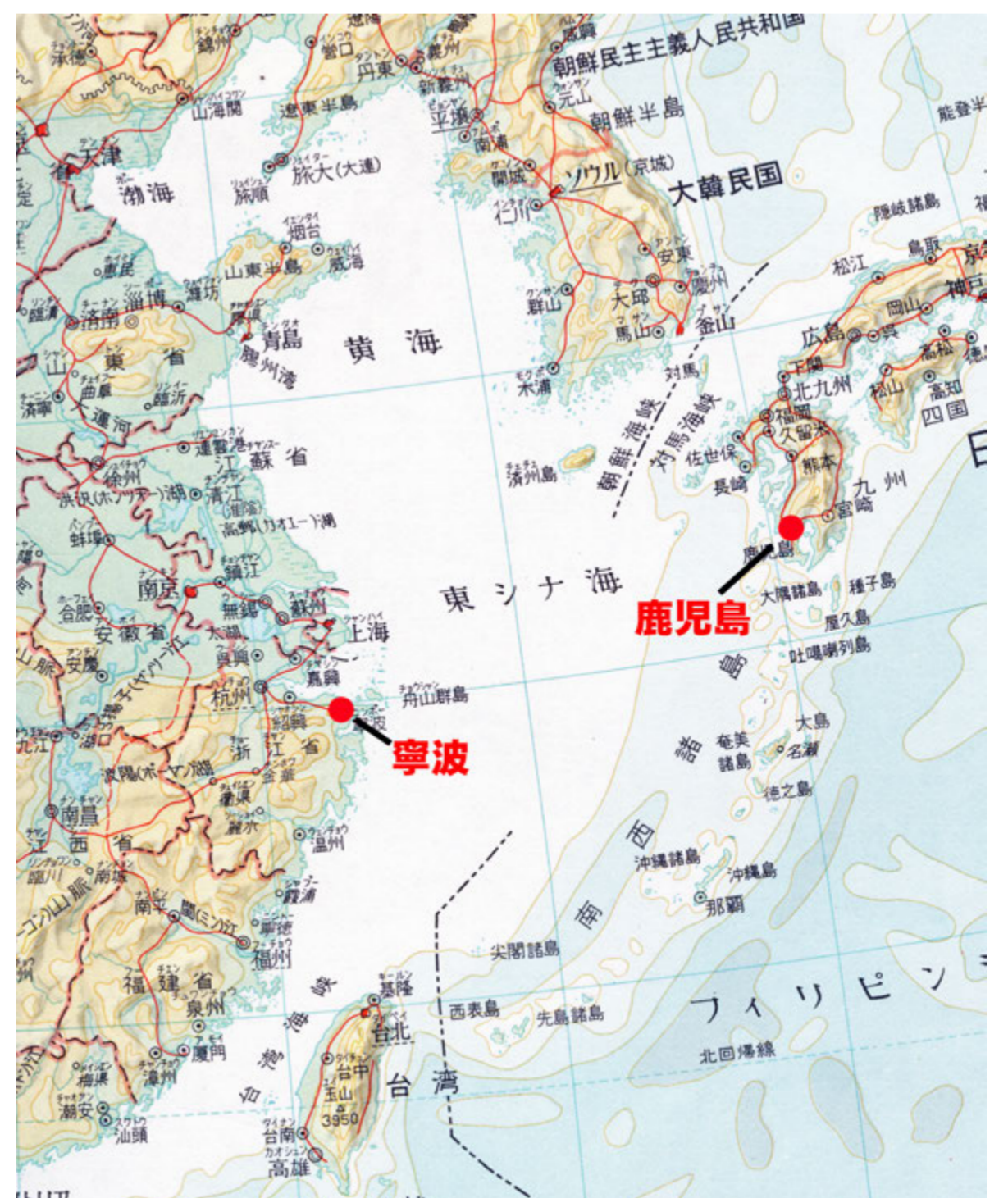
石帯



中世の成果（1）

芝原遺跡の発掘調査報告書が刊行されたことによつて、^{もったいまつ}持躰松遺跡と渡畑遺跡を含めた万之瀬川下流域の交易港としての状況がはっきりしてきました。

白磁や青磁の出土数から、11世紀後半～12世紀後半の中世前期と、14世紀後半～17世紀前半の中世後期に中国貿易のピークがあったことが判明しました。国内産陶器としては、12世紀中頃～12世紀後半の畿内産瓦器^{がき}が出土しており、「平清盛」が活躍した時期に相当します。建物およびカマドや墓も多くみつかっており、倉庫や市場が発達していたこともわかります。



中世の成果（2）

志布志城跡では中国明代（1368～1644）の華^か南三彩^{なんさんさい}が出土し、志布志湾岸でも中国貿易が行われていたことを示します。

外畠遺跡では、12世紀後半～13世紀中頃と14世紀後半～15世紀代の集落が報告されています。また、山口遺跡では、13世紀後半～14世紀前半の掘立柱建物跡30棟や墓4基などがみつかかり、当時の集落景観が復元されつつあります。

